

那覇市立壺屋焼物博物館の位置づけと開館の経緯（下）

渡名喜 明

目次

（上）（創刊号）

はじめに

1. 博物館と博物館法
2. 壺屋焼物博物館と那覇市伝統工芸館
3. 「基本構想」に見る理念と方針
4. スケジュールと組織
5. 常設展示基本計画

（下）（本号）

6. 展示シナリオづくりと資料収集—常設展監修委員会と資料評価委員会
7. 開館記念特別展
8. 図録など各種刊行物の発行
9. 課題、その後

6. 展示シナリオづくりと資料収集—常設展監修委員会と資料評価委員会

1996年3月、わたしの那覇市教育委員会配置が内示された時点で、さっそく常設展監修委員に加えてもらった。この委員会は常設展示のシナリオづくりと施工を担当する乃村工芸社のプランを検討するために設けられたものである。この席でわたしは常設展づくりの基本的な認識として次の3点があげられるのではないか、ということ提起し、確認を得た。

すなわち、沖縄の焼物の歴史を鳥瞰し、今後の

沖縄の焼物を展望すると、

- (1) 日本本土、朝鮮、中国、東南アジア諸地域との交流の中で、焼物が生まれ、育ってきた。
- (2) 焼物は、暮らしの中で始まり、常に暮らしとともにあった。
- (3) 沖縄の自然をベースにして沖縄の焼物は生まれ、育ってきた。

以上の三つの交わりを常設展示の基本的な指針としたい、ということである。

3月、建設敷地から出土した「ニシヌ窯」跡をどうするかで呼び出され、那覇市教育委員会文化課長の金武正紀、設計の真喜志好一、両氏と協議した。その結果、最下層から出土した1号窯を掘り出して館内に展示すること、層をなしている窯床の断面をはぎとり、これも歴史展示のコーナーに追加することで意見が一致した。

新年度を迎え、金武正紀（考古学）、那覇市歴史資料室長の田名真之（歴史学）の2氏に新たに監修委員に加わってもらい、シナリオの最終チェックに入る。監修委員会は全体会議の他に以下の部会に分かれた。

考古部会

嵩元政秀（那覇市文化財調査審議会委員）

池田榮史（琉球大学教授）

金武正紀（那覇市教育委員会文化課長）

歴史部会

高良倉吉（琉球大学法文学部教授、平成8年度

のみ)

田名真之(那覇市歴史資料室長)

民俗部会

崎間麗進(那覇市文化財調査審議会委員)

上江洲均(名桜大学教授)

美術工芸部会

平良邦夫(沖縄県文化財保護審議会委員)

津波古聡(沖縄県立博物館指導主事)

議論の中でわたしなりの変更案を示したのは、「暮らしの中の壺屋焼」のコーナーである。まず、「復元民家」(台所部分)は従来の民家調査のデータから各要素を抽出し、「デザイン」する、という従来の案に異議をとらえた。それでは、観客に誤解を与える恐れがあるうえ、学問的な検証にも耐えがたいとの理由からである。そこで、戦前建てられた木造民家で壺屋に現存するものをベースに復元し、その家の住人から聞き取り調査を行ったうえで、資料を配置することを提案し、了承された。

またこのコーナーは吹き抜けになっていて、壁は曲面になっている。この壁面では一日に十数回ナレーション付きでスライドの連続映写を行う予定になっている。そのシナリオについても新たな提案を行った。従来の案は基本テーマを「琉球の美」とし、それを焼物を中心にしながら紅型など他の工芸品も取り入れつつ画面を構成しようというものであった。しかも観覧者に親しみやすいようにイラストを多用しようというのである。これに対してわたしは、舞台はあくまで壺屋、関連写真をできるだけ収集し、それに地元の人々の語りを加えつつ連続上映する方法を提起した。イラストではその歴史的検証に手間取ること、焦点がぼける恐れがあること、が大きな理由である。全体は戦前2部、戦後2部の4部構成となったが、つ

なぎのナレーションは沖縄芝居俳優の北島角子を起用することも提案、いずれも監修委員会で了承され、そのように変更された。

一方、資料収集については1996年度12月議会で補正予算に計上・議決されたのを受けて、1月30日に「那覇市教育委員会焼物博物館準備室資料の評価に関する要綱」および「同資料収集要綱」を策定して資料収集評価委員会を開催、関連資料の評価をお願いした。資料の真贋および焼物博物館の展示にふさわしい資料か否かを審議・評価してもらうものである。

すでに市民には資料の寄贈や寄託を市の広報紙やマスコミで依頼し、申し込みも壺屋地元をはじめとして増えつつあったが、初めに述べたようにゼロからの出発であったため、展示シナリオを埋める資料がなかったり、シナリオにない資料が出てきたり、結局展示シナリオづくりと資料収集を併行して進める結果になった。当然といえば当然だが、博物館関係者から見ればありうべかざる事態であり、当然、常設展監修委員会から同様な指摘も受けたが、関係者の絶大なご協力によってともかくも開館に間に合わせる事ができたのは幸いであった。

常設展監修委員会は、10回開催された。

7. 開館記念特別展「陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア」

「博物館準備室長」として赴任した時点では、博物館・美術館の開館時に通常開かれる「開館記念特別展」開催の話はまったくなかった。建物建設と常設展準備に忙殺され、それどころではない、という状況だったのである。そこでわたしは、開館記念特別展のテーマとして「陶磁器に見る大交

易時代の沖縄とアジア」を企画し、その準備にかかった。趣旨は下記のとおりである（抜粋）。

時代の趨勢は国際化である。沖縄県の場合このキーワードは、1609年の島津侵入以前、すなわち14～16世紀の琉球王国が、中国・朝鮮・東南アジアそして日本との間で自主的な交易活動を行うことによって繁栄していた時代の現代的再現をイメージしながら語られることが多い。その標語ともいうべきが、1458年鑄造で首里城正殿前に掛けられていたいわゆる「万国津梁の鐘」の銘文である。「大交易時代」とは、その銘文が記す「舟楫を以て万国の津梁と為し、異産・至宝は十方刹に充滿せり」（船舶を諸国と結ぶ架け橋とすることによって、異国の宝物類が国々に充滿している）という時代であった。

ところが現在では、沖縄県立博物館に所蔵・展示される万国津梁の鐘他のいくつかの梵鐘や海外交流史料として知られる『歴代宝案』（残るは写本のみ）を除けば、この大交易時代の遺産を普段見ることはできない。その大きな理由は、この時代の遺産が極めて少ないということだが、唯一例外がある。

その例外こそ、県内各地の遺跡で出土しているおびただしい数の輸入陶磁器類である。（中略）

壺屋焼物博物館は、基本方針に「国際化の視点」と「陶磁史研究の視点」を掲げている。そして「焼物」の概念を、陶器や壺屋焼に限定せず、土器から磁器まで幅広く収集・展示する方針をとっている。沖縄における輸入陶磁器の時代は、沖縄における本格的な陶器生産に先行し、しかも直接間接に沖縄における後続の陶器生産に影響を与えている。しかし常設展示に占める輸入陶磁器の時代のスペースは限られている。（以下略）

「展示方法」は下記のとおりである。

那覇市教育委員会及び県内市町村、県教育委員会がこれまで発掘してきた輸入陶磁器の陶磁片（復元された資料を含む）を出土地、時代順、産地別に並べるとともに、これらの資料と同時期、同産地、同種の陶磁器の完品と比較することによって、「大交易時代」の沖縄（琉球）がアジア諸地域とどのような文化交流を行っていたかを明らかにする。

「展示の意義」は下記の通り。

考古学者や一部の陶磁器研究者にとっては、沖縄から出土する同時代の輸入陶磁器の出土量が県外の例に比して圧倒的に多いということ、言い換えれば当時の沖縄のアジア諸国との文化交流がハイレベルにあったことは知られているが、そのことを具体的に示した展示会は、県内ではかつてない。この展示会を開催することによって、当時の那覇がアジア地域における国際都市として活躍していた姿を明らかにすることができよう。国際都市構想をかかげる現在の沖縄県にとっても、またその中核を担わんとする那覇市、平和都市・文化都市・生活都市をまちづくりの指針とする那覇市にとっても、この展示会から示唆を得るところは大きいと考えられる。

以上の企画案をもとに、その展示作業を準備・点検するための諮問委員会として「特別展監修委員会」を設置することになった。委員は以下の方々である。

長谷部楽爾（元東京国立博物館次長）

尾崎直人（福岡市美術館学芸員）

金城亀信（沖縄県教育庁文化課主任）

金武正紀（那覇市教育委員会文化財課長）

会議は3回開催、原案の検討、展示資料・解説

パネル・図録内容の検討、展示状況の最終確認などを行った。

準備室の当初案は、完品を収集してこれを主とし、出土資料を従とする企画であったが、完品を集めることは予算や時間の制約でむずかしかったこと、監修委員の方々が首里城出土の中国・東南アジア資料を実見したところ、全国的に見てもハイレベルのものであることが判明したこと、この二つの理由から出土資料を主とする展示会に変わった。

なお、同展に出品された資料を含む「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器」518点は、平成12年6月27日付けで国指定（重要文化財）となった。展示資料の多くを記念展図録『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』で見ることができる。

8. 図録など各種刊行物の刊行

博物館開館に当って準備しなければならないいくつかの刊行物がある。まずは案内リーフレット。当初の予算要求では日本語、英語、中国語、韓国語、スペイン語の5種を要求したが、韓国語とスペイン語のそれは、カットされた。大きさは四つ折りで上着のポケットに入るサイズとし、壺屋散策のルートマップを添えている。受付に常置するほか、広報活動に活用している。

次に『概要』。展示の基本方針をトップに持ってきたうえで、事業案内、展示案内、施設案内、観覧案内を掲載し、関係者に配布している。

開館および開館記念特別展案内ポスター。このポスターは当館の〈顔〉となるため、デザインを県内・国内のみならず海外の展覧会においても数々の受賞歴を持つ宮城保武氏に依頼し、好評を博した。宮城氏には開館記念特別展図録、常設展ガイ

ドブックのデザインもお願いしている。

常設展ガイドブックは、常設展示の内容に沿って構成されている。すなわち、「1. やきものの基礎知識」「2. 沖縄の焼物の歴史」「3. 焼物の製法」「4. 壺屋焼の技法」「5. 暮らしと壺屋焼」「6. 壺屋焼の特徴的な作品」「7. 屋外展示・掘り出された湧田の平窯」の順である。A4版、32ページ。定価680円。ちなみに、博物館入口ロビーに掲示されている「観覧者のみなさんへ」を、同ガイドブック冒頭に掲載しているので以下に紹介する。この文章は当館の常設展示の基本的な考え方を示すものである。

人が手を使い、火を使い、自然を素材として作り続けて今にいたる焼物。それは、長い歴史を持つ人類の文化遺産です。

わたしたちの沖縄でも、人々は周辺地域と交流しながら、自然に親しむ暮らしの中で焼物の文化を育ててきました。焼物の歴史をたどると、時代の求めに応じながらさまざまに変化してきたことがよくわかります。

そのようすを、沖縄の焼物を支え、リードしてきた壺屋と壺屋焼を中心に描くのが、わたしたちの博物館の展示のテーマです。この展示を壺屋のまち並みにつなげていただき、壺屋焼と沖縄の焼物のこれからを考えていただければ幸いです。

開館記念特別展図録『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』。これについては前述の通りである。構成は第一部「陶磁器輸入の流れ」、第二部「輸入陶磁器の精華—首里城『京の内』跡の出土資料から」からなり、解説を金城亀信・金武正紀両氏に依頼、巻末論文を「中国の陶磁器」と題

して長谷部楽爾、「東南アジアの陶磁と沖縄」と題して尾崎直人両氏にお願いした。いずれも特別展監修委員である。A4版、54ページ。1680円で販売している。

9. 課題、その後

1998年2月1日、那覇市立壺屋焼物博物館がオープンした。開館時点で残された課題をいくつか拾いあげると、まず学芸員配置の問題。わたしたちは、準備段階から4人の配置を要求してきた。考古学・歴史・民俗・美術工芸を専門とする学芸員である。というのは、沖縄の焼物の歴史、焼物文化をテーマとする当館にとって、あるいはこれからの焼物研究の展開を見据えるとき、これらの分野からのアプローチは不可欠だからであり、展示の構成もその方向で行われている。同年3月、現状の2人にもう一人を追加して3人体制で行くことが確定した。しかし配置は1年遅れて、99年4月に行われた。現行は考古学1人、歴史・民俗担当1人、美術工芸担当1人である。

資料の調査研究と収集活動。学芸員を主とした調査研究は博物館活動のベースであり、これ抜き博物館活動はありえない。その意味で調査研究紀要の刊行が必要とされるが、紀要については99年度創刊。開館記念特集号として、開館にいたる経緯や館の位置付けなどの報告を掲載している。

一方、常設展示を完成できたのは開館ほぼ一ヶ月前の97年12月末日である。市民からの寄贈・寄託と購入によって、とりあえずシナリオをつなぐことができた、といった段階でのスタートとなった。準備室の設置段階で資料はほぼゼロという状況と、従来の沖縄陶磁研究が歴史、美術工芸、考古、民俗などの分野で相互に連携することなく

いめいで行われていたことが、展示実施計画の一番大きな障害となった。資料の充実と調査研究の深化による常設展の充実が切に望まれるところである。

特別展・企画展の実施。博物館における常設展示と特別展・企画展の開催は車の両輪のようなものである。ところが、開館2年目のこの分野の予算はゼロ、翌99年度に市民・県民から寄贈・寄託された資料を紹介する「収蔵品展」開催の予算が認められ、2000年度に企画展「人間国宝の茶陶」展と特別展「日本のやきもの—日本民藝館名品展」を開催することができた。市民に歓迎される企画展・特別展の継続的な実施が課題である。

地域との連携強化。博物館敷地の8割を地元（壺屋町民会）から寄贈されたことに端的に示されているように、壺屋・地域・市民のこの博物館に寄せる地域活性化の核としての期待は大きい。そこでまず企図したのは、地元商店街（壺屋やちむん通り会）の開店時間帯に近い午前10時～午後6時を開館時間として設定したことである。類似他館の大半は、午前9時～午後5時となっている。99年2月には館前通り（壺屋やちむん通り）が琉球石灰岩で舗装整備されたことと焼物博物館開館1周年を記念して「通り会」が開催した「壺屋やちむん通りまつり」に連動した企画「壺屋やちむん通り展」を開催、壺屋陶器事業協同組合青年部が発足した2000年度には、当館から提起して同部発足記念展を3階ギャラリーで開催している。

市民・観覧者サービスの提供・拡充。1階ロビーには受付・トイレの他に、「ゆんたくコーナー」がある。ここには常時職員を配置し、求めに応じて展示案内を行う他、焼物や壺屋・観光地に関する情報などを提供している。また、一角にテレビ

を設置、焼物に関するビデオ上映を随時行っている。1階ロビーは無料ゾーンとし、通りを行く人々のトイレ使用、飲料水提供、壺屋焼・「壺屋やちむん通り商店街」に関する情報提供などのサービスを行っている。2000年度からボランティア養成講座を実施しており、01年度から展示室でボランティアによる展示解説が開始される予定である。

学校教育との連携。壺屋焼物博物館はまず生涯学習施設としてある。もちろん文化財保護施設としての役割も併せ持つ。一方では未来の那覇市・沖縄県をになう児童生徒の学習施設でもある。ところが開館準備段階では、こども向けの配慮は解説文の表現をできるだけやさしく、という程度で、はたして子どもたちが常設展示を見てどの程度理解できるか、というチェックをするゆとりを持てなかった。はたして開館後の小学校の先生方の意見を聞くと、低学年は言うまでもなく、高学年にも事前指導がなければむずかしいのでは、ということであった。その意味では今後の常設展の改良が課題とされるが、一方では学校の先生方の事前学習やこども向けの見学の手引き作成、子供たち向けの体験教室などの、いわば常設展示の行間を埋める事業が求められてくる。99年度から実施している「夏休み親子やきもの体験教室」や「壺屋やちむん探検隊」、「探検隊ノート」の作成、小学校教師向けの常設展学習会と利用案内の講習はその解決を図るために開催され、現在にいたっている。2002年度から本格的に始まる学校の「総合的学習」時間に向けて博物館でもより積極的な対応が求められており、その準備・試行を進めているところである。

広報活動。前述の印刷物配布による広報の他にマスコミ各社に対する報道依頼を随時行っている。

2000年度から独自制作のホームページによる広報も行っているが、要はいかに市民のニーズに応えられる活動を行っているかのひとことに尽きる。

最後に、21世紀は博物館の時代である。前世紀は19世紀にくらべて、人とくもの関わりにおいて大きく変化し、また変化した分大きなつぎを21世紀に回した時代である。新世紀は両者のかかわりが根本から問い直される時代である。そんなとき、人とくものかかわり方を焦点に据えて活動を続けてきた博物館の役割は、いよいよ評価される反面、注文も多くなることが予想される。個々のくものが残る・生まれる・生きる〈場〉すなわち〈現場〉が、博物館の活動の対象として不可欠となり、またもうひとつの拠点となるだろう。わが那覇市立壺屋焼物博物館もまちがいなく新しい時代を迎えているのである。